

未来社会を切り拓くための資質・能力を育成する学習指導の研究

～自分の生活を見つめて課題設定し、生活をよりよくしようとする生徒の育成～

埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会
熊谷市立妻沼東中学校 教諭 青木 佳苗
深谷市立上柴中学校 教諭 中原 和枝

1 はじめに

本分科会では、生徒が健康・快適・安全で豊かな住生活に向けて考え、工夫する活動を通して、これからの生活を展望して、住生活の課題を解決する力を養い、住生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を育てることをねらいとしている。

(1) テーマ設定の理由

現在、急激な少子高齢化やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会情勢は大きく変化している。このため、学校教育では子供たちが様々な変化に主体的に関わり、自らの課題を見付け、他者と協働して課題を解決していく力を身に付けることが重要である。

近年は、家族形態や住まい方が多様化し、健康・安全・快適に住まうための課題も変化している。また、少子高齢社会の進展や自然災害への対策も一層求められてきている。

そこで住生活の学習を通して、習得した知識・技能を活用し、未知の状況にも対応できる力を養うことが必要である。

学んだことを活用して社会・世界とどのように関わり、よりよい人生を送るのかという「学びに向かう力・人間性等」の育成こそが、今後ますます重要になってくると考え、本研究テーマを設定した。

(2) 生徒の実態

研究を進めるにあたり、健康・快適・安全で豊かな住生活の現状を知るために、北部地区の生徒にアンケート調査を実施した。その結果、家庭内の安全を考えて工夫していることがある生徒は 24%と少なく、「家具などの角にクッションになるものをつける」という回答が多かった。また、もしもの時のために備えをしている生徒は 36%であったが、「防災バッグに食料や水などを用意している」という回答

が多く、「家具を固定している」などの住まいの対策についての回答はほとんど見られなかった。「ない」と回答している生徒の中には、工夫していることや備えていることすら気付かない生徒もいると考えられ、住まいの安全について興味関心が低く、自分事として捉えて安全対策を行っている生徒は少ないと推測できる(図1)。

これらのことから、住生活の学習において主体的に関わり、自ら問題を見いだして課題を設定し、他者と協働して課題を解決する力を身に付けさせたいと考えた。

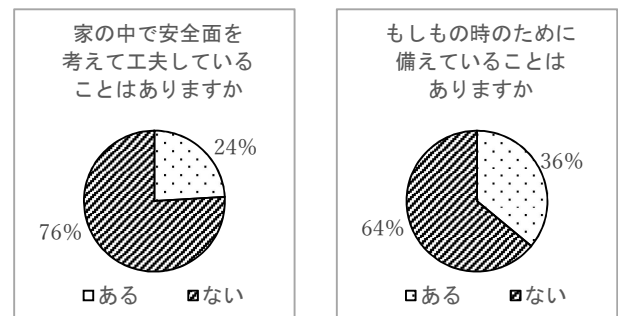


図1 アンケート結果

(3) 目指す生徒像

北部地区の生徒の実態から、実生活と結びつけて知識や技能を習得して、それを活用していくことが必要であり、目指す生徒像を以下のように考えた。

- ・生活の中から自ら問題を見いだして課題を設定し、他者と協働して解決できる生徒
- ・習得した知識や技能を活用し、生活をよりよくしようとする生徒

2 研究仮説

身近な生活の中で問題を見いだして課題を設定し、実践的・体験的な活動を積み重ねることで、生活をよりよくしようとする実践的な態度を養うことができるであろう。

3 研究内容

(1) 視点1 指導計画の工夫

① 小学校との系統性を踏まえた指導計画

小学校では、「B 衣食住の生活」の(6)「快適な住まい方」に関する基礎的・基本的な知識及び技能などを学習した。これを基盤にして中学校では、幼児や高齢者の家庭内の事故を防ぎ、自然災害にも備えるための住生活の整え方を重点的に扱い、安全な住まい方の学習の充実を図った。さらに「A 家族・家庭生活」の(1)家族・家庭の基本的な機能と関連を図った。

② 安全の意識を高める指導計画

小学生までは身の回りのことを保護者にしてもらっていたようだが、次第に自立していく時期である。そのために、自分で住空間を整えるだけでなく、家庭生活や地域の一員であることを自覚するには好機であると考え。

また学校全体の取組として、防災教育に力を入れており、入学時に生徒全員へ防災袋(写真1)を配布するとともに、校内で長期保管を行っている(写真2)。生徒は、長期休業や年度末に家庭へ持ち帰り、中身の入れ替えを行っている。これらのことから、防災教育との関連を図り、家庭分野の授業では、1学年で住生活の学習を充実させ、安全な住まい方への意識を高められるようにした(表1)。



(写真1: 防災袋)



(写真2: 保管倉庫)

表1: 題材「安心・安全な住まいを考えよう」(8時間)

時	○ねらい・学習活動<評価>
	題材名 住まいのはたらきと心地よさ (3時間)
1	○健康・快適・安全で、持続可能な住生活を送ることについて問題を見だし、課題を設定している。 ・小学校の学習や、今までの経験から暮らしの中で困ったことや問題を見だし、課題を設定する。 ・自然災害や環境問題についても考える。 <思>学習カード
2	○自分や家族の生活行為と住空間との関りが分か
3	り、住居の基本的な機能について理解している。 ○安全・安心な住まい方について生活場面を想定して考え、問題を見だして課題を設定している。

	<ul style="list-style-type: none"> ・住空間の簡単な図を見て、住居の基本的な機能を知る。 ・和室と洋室の違い、特徴を知る。 ・家族に必要な住空間と生活行為との関わりを簡単な図を活用して考える。 <知・技>ワークシート, 確認テスト
	題材名 安全な住まいで安心な暮らし (5時間)
4	○家庭内事故の種類とその原因や、幼児や高齢者の安全を考えた住まい方について理解している。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児や高齢者の疑似体験を通して、幼児や高齢者の家庭内事故の特徴や対策について話し合う。 ・安全で快適な住まいとは何か考え話し合う。 <知・技>学習カード, パフォーマンステスト, 確認テスト
6	○自然災害に備えるため、屋内を安全に整備する必要性とその方法について理解している。
7	<ul style="list-style-type: none"> ○健康・快適で、自然災害に備えた、安全・安心な住まい方を工夫している。 ○災害時の行動マニュアルについて評価したり、改善したりしている。 ・室内のイラストを見て危険な箇所を見付け、住空間の写真に安全対策を書き込む。 ・ハザードマップを見ながら、災害時の行動マニュアルを作成する。 ・中学生としてできることを考え、話し合う。 <思・主>行動マニュアル
	夏休みの実践
8	<ul style="list-style-type: none"> ○我が家の防災対策について実践した結果を評価・改善するとともに、新たな課題を見付け、次の実践に取り組もうとし、安全・安心な住まい方や自然災害の備えについて工夫し、創造し、実践しようとしている。 ・夏休みの実践発表を行い、友達の発表を聞いて、自分の実践を評価・改善し、新たな問題を見だし、課題を設定する。 <思・主>学習カード, ポートフォリオ, 行動観察

(2) 視点2 指導法の工夫

① 導入の工夫

生徒は、住まいを快適で安全に整えておくべきだと思っているものの、イメージが乏しく実践に結びつかない傾向がある。そこで、近年発生している自然災害のニュースや被害の写真を提示し、学習への興味関心を高められるようにした。また、ハザードマップを活用し、自分の住んでいる地区の災害被害予測を提示することで(写真3)、自分事として捉えられるようにし、災害時の備えの重要性や必要性を強く感じられるようにした。

② 体験的な学習を通して考えを深める工夫

幼児や高齢者の疑似体験を通して（写真4・5）、中学生には分かりにくい危険箇所気付けるようにした。例えば、幼児の目線の高さになり、チャイルドビジョンを用いて心身の特徴を考えた。また、高齢者疑似体験装具や視聴覚教材を用いて、身体機能の低下を実感できるようにした。これらの体験を通して、新たな問題に気付いたり課題を見いだしたりできるようにした。

③ 地域の特性を生かした題材の工夫

地域の特徴として、河川に囲まれて土地が低く、大雨になると大規模な洪水の被害が予想されている。河川敷の近くに住まいがある場合は、災害時の備えとして土のうを準備している家庭も多い。そこで、各家庭における危険箇所や備えの確認、通学路の点検、安全な避難方法などについて意見交換し（写真6）、生徒が家庭や地域の生活の中から問題を見だし、それを自分の課題として捉え、主体的に学習に取り組めるようにした。



（写真3：ハザードマップの活用） （写真4：幼児の目線）



（写真5：高齢者の疑似体験）（写真6：協働的な学びの場面）

④ 発問の工夫

生徒は、災害への備えがある方がよいと思っはいるが、実際に何をどこに備えて、どれだけ準備すればよいのか、避難する時はどのような行動をとればよいのかなど、深い考えに至らない生徒も多く見られた。そこで、「なぜ、それを準備するの?」「これで家族のみんなも大丈夫かな?」などと、生徒の思考を揺さぶるような発問を工夫することで、見方・考え方の視点を広げ、より深い学びに結びつけられるようにした。

(3) 視点3 評価の工夫

① 知識・技能を見取るための工夫

住居の基本的な機能や家庭内事故の防ぎ方などについて、授業の最後に確認テストを実施した。これを次時の授業までに採点し、授業での理解度を把握できるようにした。生徒へ返却する際は、前時の授業を振り返り、自分は何が理解できていないのか、どこでつまづいたのかなどを振り返ることができるようにし、課題解決へ向かうための知識・技能を確実に身に付けることができるようにした。

② 思考力・判断力・表現力を見取るための工夫

〈7時間目 行動マニュアルの一部〉

「十分満足できる」状況(A)と判断した生徒の具体的な例

災害時の行動マニュアルを作成しよう！

○避難所生活を送ることになった時の問題点を挙げ、解決策を考えよう！

問題点	課題	解決策
プライバシーが保てない	災害時にどうしたらプライベート空間が作れるのか。	個人スペースが保てる仕切りを作る。
幼児が怖がる、飽きる	幼児が安心して過ごすためには、どうしたらよいのか。	声掛けや安全面に配慮して、幼児と遊んであげる。

○災害に備えて自分はどのようなことができるかな？

我が家では家具の固定がされていなかったり、避難袋もちゃんと確認をしていなかったりしたので、いつ災害が起きてもいいように、家具の固定などはしっかりしたいと思いました。家で、家族と話し合い、マニュアルを作り、もう一度作った防災バッグを確認しておくといいという事も、とても大切なことだと改めて思いました。また避難所では、他の家族の小さい子どもの相手をしてあげたり、高齢者や手足が不自由な方がいたら困っている時に手助けをしたり、自分のできることを積極的に手伝っていこうと考えました。「もしも」の時を考え、正しい判断で行動できるようにしていきたいです。

自然災害への備えの必要性と方法を理解し、災害が起きた状況を想定し、家族や周囲の人のことも考えた具体的な方策が論理的に記述してあることから(A)と判断した。

③ 主体的に学習に取り組む態度を見取るための工夫

長期休業を活用して家庭で実践し、休業明けに実践発表会を行った。発表会では、友達の発表を聞いて自分の実践の評価・改善を行った。その様子を行動観察やポートフォリオで思考の変容を評価で見取れるようにした。

〈8時間目 ポートフォリオの一部〉

「十分満足できる」状況 (A) と判断した生徒の具体的な例
学習を振り返って…

「安全・安心な住まい」とは？学習前と学習後を比べて分かったこと・感じたこと・これからの活動について

住まいは、身を守るだけでなく心の安らぎも得られる場だと分かった。家族と仲良く生活していくために、お互いの想いを大切にして住空間を整えていきたい。

また、自然災害への備えがより一層重要であると分かったので、日頃から家具の配置や固定などの家の安全点検をして、家に常備しておくものなどを見直していきたい。

安全で安心な住まいを家族と協力してつくっていくことと併せて、もしもの時、地域の人と協力して動けるように、地域の避難訓練などにも積極的に参加したい。

さまざまな新しい視点を獲得し、「安心・安全な住まい」を考えている。家庭での実践について、新たな課題を見付けるとともに、改善に向けた意欲だけでなく、これからの活動についても具体的に記述してあることから (A) と判断した。

4 研究の成果と課題

(1) 視点1 指導計画の工夫

小学校との系統性や防災学習との関連を図りながら、1学年で住生活の学習を履修させることで、安全な住生活への意識を高めることができた。長期休業で実践したことを授業での実践発表会に繋げたことで、新たな課題に気づき、課題解決に向かい、学びのサイクルが生まれた。今後は、外部（専門家・行政・消防など）との連携を取り入れていく。

(2) 視点2 指導法の工夫

体験的な学習を充実させたことで、家族・家庭や地域における生活の中から課題を見いだして課題を設定し、解決策を考えることができた。住生活における地域の特性を生かした題材を扱うことで、より

身近で自分事として捉えられ、自分だけでなく、家族や地域のことも意識して考えられた。また、疑似体験を行ったことで、自分だけの視点ではなく、幼児や高齢者の立場に立って、住まいの安全を考えることができた。今後は、生徒の興味関心をさらに高めることができるように、教材教具の改善を図っていく。

(3) 視点3 評価の工夫

授業実践を通して、「おおむね満足できる」「十分満足できる」生徒の評価規準を見直すことができた。

また題材を貫く課題を設定したことにより、生徒が自分の生活をよりよくするための課題を設定することができた。そのため、身に付けた知識や技能を活用して、自分で考え、判断・表現し、家庭での実践につなげることができた。今後は、学習による変容が確認できるようなパフォーマンス評価などを開発し、新たな評価方法を考えていく。

5 おわりに

家族形態の変化や自然災害への備えなど、健康・安全・快適に住まうための住生活の諸課題に対して、自分の生活における問題を見いだして課題解決ができる生徒の育成をねらいとして本研究に取り組んだ。

今後は、さらに「安全・安心な住まいとは何か」を考えさせながら、地域の特性を理解して、専門家や地域と連携を密にした授業実践を行えるようにしていく。

自らの課題を見付け、「他人事」でなく、「自分事」として、家族や地域と協力・協働して課題を解決していくことは、今後より一層重要になってくると考える。他教科・他領域との関連を踏まえた授業計画をさらに工夫し、機能面、精神面共に安全・安心で快適な住まい方を実現できる生徒の育成につなげていく。

〈参考文献及び引用〉

・埼玉県中学校教育課程指導・評価資料

令和3年3月埼玉県教育委員会

・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 技術・家庭】令和2年3月文部科学省「国立教育政策研究所 教育課程研究センター」

・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編